An Essay on Hermann Hesse's "Jugendgedenken"(1931): In Comparison with His "Das Nachtpfauenauge"(1911)

メタデータ	言語: jpn 出版者: 公開日: 2017-10-03 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: メールアドレス: 所属:
URL	http://hdl.handle.net/2297/36953

金沢大学歴史言語文化学系論集　言語・文学篇
第6号　2014年　41～53

ヘッセ「少年の日の思い出」(1931) 試論
—「クジャクヤママユ」(1911) との異同をめぐって—

佐藤　文彦

0　はじめに：日本（語）でしか読まれないドイツ文学

日本でもっともよく読まれるヘッセ文学、ドイツ文学、あるいは外国文学のひとつに目される「少年の日の思い出」Jugendgedenken（1931）が、ドイツ文学研究の世界で論じられることはきわめて少ない。[1] 全20巻から成る近年の『ヘルマン・ヘッセ全集』[2] にも収録されていないこの小品は、両大戦間期ドイツの一地方新聞（1931年8月1日付 *Würzburger General-Anzeiger*）紙上で発表された。1940年、高橋健二（1902-1998）による翻訳が『放浪と懐郷』（新潮社）収録の一編として刊行される。1938年には『車輪の下』*Unterm Rad*（1906）を、1939年には『デミアン』*Demian*（1919）を翻訳し、いずれも岩波文庫から刊行していた高橋は、「少年の日の思い出」について、「ヘッセの得意中の得意、彼のお家芸とも言ふべき少年物の典型的な作品である」と述べ、「彼の力作「車輪の下」や「デミアン」の縮図を見る思ひがする。一小品ではあるが、珠玉の作と言ひ得るであらう」[3] と評価が高い。高橋は翌1941年、同じ新潮社から「ナチス前東京支部長」ヤーコプ・ザールとの共編著『ヒトラー・ユーゲント』を刊行、[4] そして1942年、大政翼賛会文化部長に就任する。

「少年の日の思い出」が戦後60年以上にわたり中学校国語教科書に採録され続け、読み継がれている日本の（教育現場の）特殊状況については、本論では言及しない。本論の目指すところは、「少年の日の思い出」をその初稿であるところの「クジャクヤママユ」Das Nachtpfauenauge（1911）と比較し、20年後のヘッセの書き換えの是非について検討することで、いまや日本（語）でしか読まれないこのドイツ文学の新たな読みの可能性を提示することにある。初稿と改稿の「両作品の文章を比較することは、まことに興味深いことである」と指摘しながら、その試みを行わずして「当然のことながら、20年後に推敲して発表された「少年の日の思い出」の方が文学作品としての完成度は高い」と断定する先行研究[5] への反論の意味合いも多少はある。加えて本論は、以下のように締めくくられた別の先行研究への、四十歳の論者からの応答の試みでもある。

> この物語は（もし一般化しなければならないなら）、少年時代の喪失、幻滅と、苦い現実の到来の物語である、というのが、五十歳を越えた私による読み取りなのであるが、別の世代の読者は別のようにも読むことであろう。初稿を書いた頃のヘッセ（三十代半ば）と近い年齢の人、また作中の少年に近い年齢の人はどうだろうか。ぜひ尋ねてみた

いものである。[6]

1　十歳の少年の日の思い出：コムラサキをめぐって

初稿「クジャクヤママユ」と改稿「少年の日の思い出」の筋に大差はない。いずれも梗概は以下の通りである。

「私」を訪れた来客が、書斎で主人から蛾や蝶のコレクションを見せられたことをきっかけに、同じ趣味にまつわる自身の少年時代の思い出を語り始める。

隣家の少年の貴重なコレクション（クジャクヤママユ）を見たい一心で彼の部屋に侵入した十二歳の「ぼく」（＝導入部の来客）は、誘惑に負けて盗みを犯してしまう。すぐに我に返ってその蛾を元に戻そうとするものの、すでにポケットの中で潰してしまったことに気づく。その日の夜、母に促されて謝罪に訪れた「ぼく」は、少年から怒鳴られる代わりに冷淡な仕打ちを受ける。そして寝る前にひとり、それまでの自身のコレクションを粉々に潰す。

ふたつの版を読み比べてわかる明らかな相違は、「少年の日の思い出」への書き足しはほとんどなく、「クジャクヤママユ」からの削除と書き換えが顕著だということである。例えば導入部、初稿では「私」を訪れた客は「ハインリヒ・モーア」Heinrich Mohr（72）と命名され、さらに「日焼けした細面の顔」mit seinem braunen, schmalen Gesicht（73）をしているとも描写される。

1931 年の改稿に際しヘッセはこういった細部を数多く省いた。その態度は来客の回想場面においても一貫している。回想を始めてすぐに「ぼく」は、蝶の採集を始めたのは八歳か九歳の頃で、十歳くらいになった二度目の夏には、この「遊戯」に熱中していたと述べる。そして隣家の少年エーミールとの間で起こった最初のエピソードを語る。それはこの小説において、十二歳になって起こるあまりに苦い思い出の伏線の機能を果たしている。

珍しい青いコムラサキを採った「ぼく」は展翅してエーミールに見せる。すると彼は「専門家のようにそれを鑑定し、その珍しいことを認め、二十ペニヒくらいの現金価値はある、と値踏み」（75 / 7）する。その後、エーミールは「ぼく」の展翅の仕方に難癖を付け始めるのだが、その場面と前後して、1911 年の初稿には次の一文が見られる。

> この少年、エーミールは、あらゆるコレクションの対象、とくに切手と蝶を、それにふさわしい金銭価値で見積もることができた。（75）

この一文から読み取れるのは、エーミールには切手収集の趣味もあるということ、さらに

その価値を値踏みすることができるということである。改稿された版では削られてしまったこの一文の意味するところは決して小さくない。エーミールに切手収集という趣味が加えられることで「ぼく」とエーミールの対比はより際立ったものとなるからだ。蝶の収集に熱中した十歳の「ぼく」は「朝早くから夜まで、食事になんか帰らないで、外にいることがたびたびあった」(73 / 5)。昼夜を問わず蝶を追いかける僕の様子は、さらに詳しく描写される。

> 強く匂う乾いた荒野の焼けつくような昼下がり、庭の中の涼しい朝の時間、神秘的な森のはずれでの晩方、ぼくは宝を探す人のように網を持って待ち伏せていた。(74 / 5)

高橋健二が「遊戯」と訳した「ぼく」の蝶の収集は、原文では Sport である。網という武器を手に自然を駆け巡る「ぼく」の様子は、さながら猟銃を構えるハンターのようである。その証拠に「ぼく」は蝶が花にとまって羽を上げ下げしているのを見つけると、「捕まえる喜び」Jagdlust (74 / 5) に息が詰まりそうになり、忍び寄ってその姿がはっきり見えてくると「荒々しい欲望」mit wilder Begierde (74 / 6) を感じると告白している。しかし粗末な道具が恥ずかしい「ぼく」にとって「獲物」Beute / Beutestücke (74 / 6) [7] を見せて自慢できる相手は妹しかいない。そんな「ぼく」が意を決してコムラサキを見せる少年として登場するのが、エーミールなのである。「ぼく」がスポーティに蝶を追いかけるのとは対照的に、エーミールは蝶と切手を同列に並べ、その現金価値を査定する少年として設定されているのは、「ぼく」との違いを示す上でたいへん効果的と思われる。エーミールが野外で蝶を捕まえるよりも、その後に室内で蝶の標本を作ることに重きを置いている様子は、以下の描写からも明らかであろう。

> 彼の収集は小さくてたいしたことなかったが、小ぎれいなのと正確な保管によって、ひとつの宝石のようになっていた。彼はその上、傷ついたり壊れたりした蝶の羽をにかわで継ぎ合わせて元に戻すという、珍しい難しい技術を心得ていた。(75 / 7)

エーミールは「小さいながらも自分だけの部屋を持ってい」(76 / 9) て、「ぼく」にはそれがこの上なくうらやましい。自然児「ぼく」と室内でこそ発揮される「技術」Kunst を心得るエーミールとの対比は、1931 年の改稿版からも読み取れるが、エーミールに切手収集という趣味が加えられていた 1911 年の初稿の方が、両者の違いはより鮮明に描かれていたと考えられる。したがって論者はエーミールから切手収集という趣味を奪ったヘッセの判断は、誤りと評価する。

また、改稿の際に削られたエーミールのこの描写は、小説の中で初めて彼の名が言及される箇所でもある。この一文がなくなることで、2 年後にいきなり「あのエーミールが」

jener Emil と、初出であるはずの隣家の少年の名がまるで了解事項であるかのように登場してしまい、読者は違和感を覚えずにいられない。次章ではその 2 年後、十二歳になった「ぼく」と「あのエーミール」の「少年の日の思い出」について、初稿と改稿の異同を考察する。その際の主要モチーフは、もちろんクジャクヤママユである。

2　十二歳の少年の日の思い出：クジャクヤママユをめぐって

クジャクヤママユを小説にどう登場させるか。初稿と改稿では、次のように異なる。

その頃、あのエーミールがクジャクヤママユを採ったという噂が広まった。(75)

その頃、あのエーミールがクジャクヤママユを蛹から返したという噂が広まった。(7-8)

この書き換えはどうだろうか。論者は後者を認めたい。エーミールには狩りに出て獲物を捕まえるよりも、室内で人工的に（künstlich）羽化させる方が、彼の「技術」力に合致して似つかわしい。そしてこの改変が施されたことで、1931 年の改稿版では、次の一段落がすっぽり省かれることになる。

こんな不思議な蛾をあの退屈なエーミールが持っているなんて! そのことを聞いた時、ぼくは最初、ついにこの珍しい蛾を目にすることができるという喜びと、それに対する燃えるような好奇心しか感じなかった。それからもちろん嫉妬がやってきた。よりによってあの退屈な小デブ野郎がこんなに神秘的で貴重な蛾を捕まえなきゃいけないなんて、汚らわしいことだと思えた。そのためぼくは、彼を表敬訪問し、その獲物を見せてもらいたいのを我慢した。けれども頭からそのことがどうしても離れなかった。次の日、学校でその噂を確かめると、ぼくはやはり出かけて行こうとすぐに決心した。(76)

「ぼく」には捕獲できなかった貴重なクジャクヤママユをエーミールが採ったという設定であれば、この段落に「ぼく」の対抗心・敵対心を読み取ることもできよう。しかしヘッセは改稿に際し、エーミールに蛾を採らせるのではなく、技術力でもって羽化させた。つまり「ぼく」とエーミールを同じ土俵に上げるのではなく、別世界に住む人間として配置し直したのである。ここまでは論者も大いに賛成である。しかし（原文では）五文から成る上記の段落を「エーミールがこの不思議な蛾を持っていると聞くと、ぼくはすっかり興奮してしまい、それが見られるのを待ちきれなくなった」(8) という、（原文でも）わずか一文に要約してしまった改稿版では、初稿に比べクジャクヤママユに対する「ぼく」の熱意はいささか減退、あるいは冷却されたものとして読まれないか。もっとも、この段落の

削除および要約に関し、改稿版では「ぼく」とエーミールの関係は「象徴的に描かれて」おり、それを「芸術的な完成」と評価する解釈も存在する。[8] しかし論者はエーミールがクジャクヤママユを羽化させたという変更を踏まえた上で、この段落は削除ではなく、何らかの書き換えが可能だったのではないか、と考える。つまり、クジャクヤママユに対する「ぼく」の関心・好奇心を、エーミールの技術に対するそれへと転化させた形での書き換えもまたあり得たのではないか、と訴えたいのである。論者には段落そのものを削除したヘッセの選択が、成功しているとは首肯し難いのである。

「ぼく」がエーミールの部屋に侵入し、クジャクヤママユを盗み、その上つぶしてしまう場面に異同は見られない。したがって次に問題にしたいのは、「ぼく」が罪を告白するために再度エーミールの家を訪れた際の彼の反応、第一声である。初稿でも改稿でも、エーミールの発言は間接話法で表記される。

> 彼は出てきてすぐに、誰かがクジャクヤママユを壊してしまった、悪い奴がやったのか、あるいはひょっとしたら鳥か猫がやったのかわからない、と言った。(79)

> 彼は出てきてすぐに、誰かがクジャクヤママユを壊してしまった、悪い奴がやったのか、あるいはひょっとしたら猫がやったのかわからない、と言った。(12-13)

初稿においてエーミールが犯人を推測する過程で「鳥」の可能性を想定している点は見逃せない。この作品で「鳥」が言及されるのはもう一箇所、クジャクヤママユの生態についての以下の描写が挙げられる。

> この茶色の蛾（引用者注：クジャクヤママユ）が木の幹や岩にとまっている時、鳥やその他の敵が攻撃しようとすると、その蛾は畳んでいた黒っぽい前翅を広げ、美しい後翅を見せる。するとその後翅の明るい大きな眼状紋がとても奇妙な、思いがけない外観を呈しているので、鳥はびっくりして蛾に手出しするのをやめてしまう。(76 / 8)

蛾や蝶の捕獲を楽しむ「ぼく」はクジャクヤママユにとって敵でしかない。したがって彼は鳥と同列に並べられて然るべき存在である。ヘッセは改稿に際し、猫の仕業かもしれないというエーミールの推測は残しながら、鳥の可能性は除外した。なぜなら鳥だと「恐れをなして蛾に手出しするのをやめてしまう」ことを危惧したためと考えられる。しかしこの矛盾は作品内において容易に解決される。というのも、「ぼく」が鳥のようにクジャクヤママユを襲った時、初稿でも改稿でも「ちょうどあの（名高い）[9] 眼状紋だけは見ることができなかった。展翅テープで覆われていたのである」(77 / 9) から、「ぼく」はクジャクヤママユの反撃に遭うことなく留針を抜いて蛾を捕獲することに成功する。そしてこの

瞬間、「ぼく」は「鳥やその他の敵」の一味に加わることになるのである。

「ぼく」がクジャクヤママユの捕獲にとどまらず、破壊まで犯したことを知ったエーミールは、「そうか、そうか、つまり君はそんな奴なんだな」(79 / 13) [10] という、(少なくとも日本の中学生の間では有名な) せりふを発する。そしてその直後、自らの蛾や蝶のコレクションすべてを差し出して許しを請う「ぼく」に対し、「結構だよ。ぼくは君のコレクションならもう知っている。君が蛾や蝶をどんなふうに取り扱っているか、今日また見ることができたしね」(79 / 13) と言い放つ。エーミールが口にする「今日また」heute wieder が、2 年前の「ぼく」のコムラサキの展翅の粗さを踏まえていることは言うまでもない。エーミールはこのひと言で、十二歳になった「ぼく」の暴力性・攻撃性が鳥のように、あるいは鳥以上に過激になっている点を鋭く指摘するのである。

以上の考察から、論者は「ぼく」を鳥と同列に並べ、クジャクヤママユを攻撃する敵と位置付けていた初稿を評価したい。クジャクヤママユを壊されたエーミールの犯人探しから、鳥の犯行という可能性を取り除いたヘッセの改稿は、「ぼく」という人物造形において失敗と見なされるのである。

3　発見される「ぼく」と結末部の不在

十歳と十二歳の時の少年、すなわち「ぼく」とエーミールの蝶や蛾の収集をめぐるふたつのエピソードから、論者はこの小説を「ぼく」の暴力性・攻撃性が暴露・発見される物語として読んだ。「発見する」という意味のドイツ語の動詞 entdecken は、英語の discover 同様、覆い (Decke / cover) を取り除くという表現に由来する。そしてこの小説の中でこの動詞およびその名詞形の Entdeckung が使われているのは、以下の三か所である。

1) エーミールは「ぼく」の標本にもっともな欠陥を「発見した」
2) 盗みを犯した直後、「ぼく」は「見つかりはしないか」という不安に襲われた
3)「見つかりはしないか」と不安を抱きながら、「ぼく」はエーミールの部屋に戻った

いずれの描写においても「ぼく」は発見する側ではなく、される側に位置付けられている点は注目されてよい。一度目は十歳の時、蝶の乱暴な取り扱いをエーミールによって発見され、二度目と三度目は十二歳の時、蛾の盗みと破壊をエーミール (の家族) によって発見されないか、不安に苛まれる。もっとも後者では「ぼく」は発見されることなく、自ら罪を告白するのだが、その結果、彼は「世界の掟のような」wie die Weltordnung (79-80 / 14)「模範少年」Musterknabe (75 u. 79 / 7 u. 12) エーミールによって、蛾や蝶の敵対者、「卑劣漢」Schuft (79 / 14) というレッテルを貼られてしまう。そして帰宅した「ぼく」がひとり闇夜に自身のコレクションを指で粉々に押しつぶす描写でこの小説は幕を下ろす。

大人になった「ぼく」の回想という形式を取る枠内物語がここで終わることに違和感はない。ただ、その後に額縁を構成するはずの枠外物語、すなわち「ぼく」を客人として迎えている「私」の物語が再配置されていない点は、この小説には導入部はあるものの結末部がないという印象を読者に与えかねない。「少年の日の思い出」には「私」と「ぼく」というふたりの語り手がいることに注目し、両者の対話・応答関係を軸にこの小説の語りの構造の重層性を論じたのは竹内常一である。

> 小説は、彼（引用者注：「ぼく」）の話を筋の通ったものとして提示している。それは、わたしが彼の話を聞き取り、ひとつの物語に書いているからである。その際、わたしはそれを筋の通ったものにし、その陰影をきわだたせ、その主題を明確にしようとしたにちがいない。その意味では、彼の語りにたいするわたしの応答は、彼の幼年時代の出来事を一編の小説に仕上げたことのなかにすでに提示されている。[11]

したがって「この小説は結末部を必要としていない」と竹内は述べる。竹内の論を援用しつつ、「ぼく」の長い回想を読み終えた後、もう一度この小説の導入部（枠外物語）に時間を「折り返して」読むことの必要性を指摘したのは角谷有一である。

> この小説では、夕方から夜へと外の闇が次第に濃くなっていく「私」の書斎で、「ぼく」が語る少年時代の思い出を聞き終えた「私」が、その思い出を再構成して語り直しているという、〈語り〉のしくみを確認しておく必要がある。つまり、「ぼく」の語りは、全体の小説を構成している「私」の語りに内包されているのである。そのため、小説全体を読み解いていくためには、プロットにしたがって一旦小説を最後まで読み終えた上で、折り返して「私」の語りに内包された「ぼく」の語りを読んでいかなければならないだろう。[12]

他方、「小説の末尾に至っても、話は現在に戻ることはない。「客」の少年時のまま、その感情の昂りのまま、小説は終わ」っている点を強調し、「この物語では、大人になった現在時からの批判も他者からの批判も排除されている」と断じる研究もある。[13] この研究では「「客」は、少年の感情や行為を、大人になった現在から批評（批判）することなどしない」[14] と述べられているが、はたして本当にそうなのだろうか。

次章では、竹内および角谷の研究に依拠しながら、十歳と十二歳の「ぼく」の少年の日の思い出を、この小説の導入部に登場する大人になった「ぼく」との関係において考えてみたい。年齢を重ね、かつて少年であった「ぼく」は、「現在から批評（批判）」できるまでに変化（成長）しているのか。この問題の考察を通じて「少年の日の思い出」に導入部（枠外物語）が設定されている意義についても、私見を述べたい。

4　少年の日の思い出を振り返る「ぼく」: 枠物語という構造

十歳と十二歳の時のエーミールとのふたつのエピソードを語り終えた「ぼく」はいま、どういった状況下にあるのか。小説の導入部に戻って確認しよう。

この小説の一文目で、大人になった「ぼく」が訪問先の主人の「書斎」im Studierzimmer（72 / 2）に腰かけた状態で登場しているのは重要である。すでに述べた通り、少年の日の「ぼく」は屋外で蛾や蝶を追いかけるのがつねだった。エーミールのクジャクヤママユを盗み、壊してしまった後も「ぼく」はなかなか家に入ろうとしない。その結果、「うちの小さい庭の中」in uns[e]rem kleinen Garten（78 / 12）で母に事実を告げ、さらに初稿では「玄関の下」unten im Hausgang（79）、改稿では「中庭」im Hof（12）で彼女から謝罪を強く促されることになる。枠内物語において「ぼく」が室内にいるのは、盗みを犯し、謝罪に訪れたエーミールの部屋と、その後の遅い時間に自宅に戻った場面のみ、そして後者では蛾や蝶のコレクションすべてを粉々に潰すことになる。

以上の事実から言えることは、少年時の「ぼく」は広い野外にいてこそ輝く存在であり、狭い空間は彼の領域ではないということである。それはエーミールが「小さいながらも自分だけの部屋を持っていた」のとは好対照である。他方、大人になった「ぼく」は室内で思い出を語るようになる。その前にヘッセは「ぼく」にひとり「夕方の散歩」Abendspaziergang / abendliche[r] Spaziergang（72 / 2）をさせているが、それは自然児だった頃の「ぼく」の名残というよりはむしろ、大人になった「ぼく」は屋外に居続けるはずなどなく、当然室内に帰って来るべきものであるという、「ぼく」の変化を強調するための一種の演出にすぎない。その証拠に「ぼく」が散歩から「帰る」という動詞（過去分詞）は heimgekehrt（72 / 2）が使われている。heim（英語の home）という前つづりを見落としてはいけない。

内と外の対比は、明るい世界と暗い世界、日光や月光の当たる世界と照明に頼らざるを得ない世界との対比にも通じる。大人になった「ぼく」が回想を始める直前、聞き手である「私」はランプを取ってマッチを擦る。他方、十二歳のエーミールは「ぼく」の自白を聞く直前、蝋燭に火を付ける。いずれの場合も「ぼく」が直接照明を操ることはない。十二歳の「ぼく」は「闇の中」im Dunkeln（80 / 14）で蛾や蝶のコレクションをつぶしたが、大人になった「ぼく」は「ランプのほやの上で煙草に火を点けると、緑色の笠をランプにのせた」Er zündete seine Zigarette über dem Lampenzylinder an, setzte den grünen Schirm über[15] die Lampe, […]（73 / 4）。

「ランプに笠をのせる」という行為は、発見する、すなわち覆い（Decke / cover）を取り除くのとは真逆の動作である。少年時にエーミールから自らの弱みを発見・暴露され続けた「ぼく」が、その苦い思い出を語る前にランプを笠で覆う意味は決して小さくない。それは、本音では触れたくない暗い過去について話すことへのためらい、逡巡する心理を象徴しているとも解釈できるし、この行為をもっと即物的に、人工的に（künstlich）灯さ

れた光への拒否反応であると取れば、「ぼく」は（エーミールや「私」のように）夜の室内に火を灯すことを好まず、むしろ（自らのコレクションを潰したあの日の夜のように）「闇の中」に身を置くことに親しみを感じている、つまり「ぼく」にはまだ太陽や月の光の方が近しく、照明を強すぎると感じる程度にしか大人になりきれていないと解釈することもできよう。

「ぼく」が自分で火を灯さない受動性、にもかかわらずランプの火を煙草に点けるという間接性に関し、この小説の導入部と回想部分で明らかな相違が見られる箇所は他にもある。導入部で「私」のコレクションを見せられた「ぼく」は、蝶の羽の裏側を見ようとするが、その時に彼は蝶のピンを外さない。

> ハインリヒ・モーア[16] はひとつの蝶をピンを持って箱から注意深く取り出し、翅の裏側を観察した。(72 / 3)

他方、十二歳の「ぼく」はクジャクヤママユのピンを引き抜き indem ich [...] an der Nagel zog（77 / 10）、さらに「掌にのせて」in der hohlen Hand（77 / 10）持ち去る。また、小説の最後に「ぼく」が自らのコレクションを粉々に潰すのは「指で」mit den Fingern（80 / 14）だった。

直接、しかも手荒く蝶を扱っていた少年時代の「ぼく」と、その事実をエーミールに暴露されて以来、蛾や蝶の収集から距離を置いて生きてきた（導入部の）「ぼく」との間で蝶の扱いに変化があることは驚くに値しない。しかし、大人になった「ぼく」の受動性あるいは間接性といった特徴が、「ぼく」の回想場面においても思わず知らず露呈してしまっている箇所があることは、これまであまり指摘されていないように思われる。エーミールがクジャクヤママユを採った（または羽化させた）という噂を聞いた時の「ぼく」の興奮ぶりは、初稿でも改稿でも次のように描かれている。

> それは今日、ぼくの友人のひとり（ein Freund von mir）[17] が百万マルクを相続したとか、歴史家リウィウスの失われた本を見つけ出したとかと聞くよりも、はるかにぼくを興奮させるものだった。(75 / 8)

十二歳の少年にとってクジャクヤママユがいかに価値あるものであったかを示すこの一文に、それを述べている「今日」heute の、すなわち「私」の書斎にいる大人になった「ぼく」の価値観が差し挟まれていると論者は考える。以下、その点について述べる。

「百万マルクの遺産相続」eine Million geerbt とは、能動的な金儲けではなく、受け身の経済活動である。「古い歴史書の発見」die verlorenen Bücher des Livius gefunden もまた、直接的な歴史体験ではなく、間接的な伝聞にすぎない。しかもこの古書は、切手や蝶同様、

現金価値を見積もられて初めて評価の対象になるものである。大人になって、室内で弱いながらも照明の光の下で少年の日の思い出を語る「ぼく」は、いまやかつてのエーミール同様、金銭に見積って価値を評価する世界に生きているのである。もっとも、そういった価値で計ってもなお、当時のクジャクヤママユの衝撃にはかなわないという結語を見落とすわけにはいかないが、それでも比較の対象として、受動的または間接的な、貨幣価値に重きを置く大人の世界観を持ち出している点に、「ぼく」の変化が読み取れるのである。

ところですでに述べた通り、リウィウスの歴史書について言及する「ぼく」がいまいるのは主人の書斎、すなわち本に囲まれた空間である。そこにある本がどういった類の本なのか、本文から読み取ることはできないが、本の世界が読む者にとって間接体験の世界であることは論を俟たない。この小説の枠内物語として語られる少年の日の思い出は、「ぼく」にとっては直接体験した出来事であるものの、それを書斎で聞いている「私」には伝聞、間接体験でしかない。さらにこの小説は、「客の話を共感を持って聞き終えた「私」が自分の受け取ったままに、できるだけ「ぼく」の語りにこめられた思いを忠実に再現しようとして語り直し」[18] たものであるならば、われわれ読者は「私」の間接体験を小説として、さらに間接的に読書体験することになる。論者の見解ではこの点もまた、この小説が枠構造をなしている意味があると思われる。

この小説の導入部、すなわち枠外物語は、枠内物語との対比において「ぼく」の変化を提示する役割を担っていると同時に、大人になった「ぼく」の回想を聞き、それを再現して語り直すもうひとりの語り手、「私」という人物を設定することで、小説の語りの構造を入れ子的に作り上げている。つまり小説の中身に関しても形式面においても、導入部（枠外物語）が果たす意義はきわめて大きいと言える。

5　おわりに：「クジャクヤママユ」から「少年の日の思い出」へ

ここまで 1911 年の初稿「クジャクヤママユ」と 1931 年の改稿「少年の日の思い出」の異同を確認し、ヘッセの書き換えの是非について検討してきた。その結果、エーミールがクジャクヤママユを（採るのではなく）羽化させた点を除き、おおむね初稿の方が完成度が高いというのが論者の見解である。しかし最後にもう一点、ふたつの版の大きな相違点であるタイトルの変更について考えてみたい。

初稿の「クジャクヤママユ」というタイトルで焦点が当てられるのは、もっぱら十二歳の日の苦い思い出であろう。そこには 2 年後の出来事の伏線として語られるコムラサキをめぐる思い出や、大人になった「ぼく」の変化と、語り手の交替が見られる小説の導入部（枠外物語）への考慮が必ずしも万全とは言えない。

他方、改稿の「少年の日の思い出」はどうだろうか。このタイトルだと、小説の導入部（枠外物語）に立脚点が置かれ、そこから「ぼく」の（直接）体験を俯瞰的かつ網羅的に

捉えることになる。さらにこの「少年」が誰なのか明示されないことで、一人称による枠内の「ぼく」の語りも、その話を聞き終えた後に語り直した枠外の「私」の語りも、どちらも含まれることになる。この小説の特徴をなす重層的な語りの構造により意識的なタイトルであるという点で、論者は「少年の日の思い出」というタイトルを推したい。

2014 年 3 月現在、「少年の日の思い出」は中学一年生の国語教科書を出版する五社（学校図書・教育出版・三省堂・東京書籍・光村図書）すべての教材として採択されている。そして学校現場では、「美に魅せられた少年が盗みを犯してしまう、人間存在への本質的な問いを扱って」いるこの「中学校教材の古典的作品」を使い、「教訓的に流れることなく、美に対する人間の持つ「情念」に共感するところから読み深めさせ」[19] る指導が行なわれているという。論者が行なったような「少年の日の思い出」を「クジャクヤママユ」と読み比べる試みも、中学校の教員の間ですでに行なわれている。[20] しかしそこでは当然のことながら、原文が参照されることは少なく、翻訳の比較にとどまっている。本論において論者は、翻訳の比較からでもじゅうぶん読み取れるふたつの版の異同について、両方の版の原文にも当たることで解釈の正当性を補強した。この試みが日本でもっともよく読まれるドイツ文学、日本（語）でしか読まれないドイツ文学の新たな読みの可能性として、何らかの問題提起となれば幸いである。

【付記】

本論文のもとになったのは、オムニバスで担当した金沢大学人文学類の講義科目（2012 年度前期および 2013 年度前期「人文学序説 1」）と 2013 年度金沢大学公開講座「日本の国語教科書のなかの外国文学」（第 1 回「ヘッセ『少年の日の思い出』（ドイツ）」）の講義ノートである。聴講学生ならびに一般の方からの反応・感想・小テストの答案によって受けた示唆はきわめて大きかった。末筆ながら深謝申し上げたい。

テキスト

Hermann Hesse: Das Nachtpfauenauge. In: Hermann Hesse (Auswahl und Nachwort von Volker Michels): *Das Nachtpfauenauge. Ausgewählte Erzählungen.* Stuttgart (Reclam UB Nr. 9832) 2009, S. 72-80.

Hermann Hesse (Hrsg. v. Kenji Takahashi): *Jugendgedenken.* Tokyo (Ikubundo) 1957.

引用に際しては括弧内に頁数（初稿 / 改稿の順に）を記す。なお、以下の既訳も参照した。

「クジャクヤママユ」(岡田朝雄訳)、日本ヘルマン・ヘッセ友の会・研究会(編)『ヘルマン・ヘッセ全集』第6巻、臨川書店、2006年、313-321頁。
「少年の日の思い出」(高橋健二訳)、学校図書『中学校国語　1』(平成13年2月20日検定済)200-216頁。
「少年の日の思い出」(岡田朝雄訳)、ヘルマン・ヘッセ(岡田朝雄訳)『少年の日の思い出——ヘッセ青春小説集』、草思社、2010年、5-21頁。

<注>

1　他方、日本の国語教育関係者による研究論文や実践報告は非常に多い。

2　Hermann Hesse, Volker Michels (Hrsg.): *Sämtliche Werke in 20 Bänden und einem Registerband.* Frankfurt am Main (Suhrkamp), 2001-2005.

3　ヘルマン・ヘッセ(高橋健二訳):『放浪と懐郷』、新潮社、1940年、引用部分は315頁。

4　ヤーコプ・ザール、高橋健二:『ヒトラー・ユーゲント』、新潮社、1941年。実際のところ高橋は翻訳者と思われるが、奥付にはザールとともに「著作者」とある。編者による「はしがき」には、本書の「原書はドイツ青少年指導本部日本派遣員・上管区指導者ラインホルト・シュルツェ氏の斡旋により、ベルリンのドイツ青少年指導本部から特に直接提供されたもので」あることが記されている。また、「はしがき」の前には「全ドイツ青少年指導者兼国民社会主義ドイツ労働党青少年指導者アルツール・アックスマン」の「本書に寄せられたる(…)序文」(の翻訳)が掲載されている。

5　岡田朝雄:「少年の日の思い出」と「クジャクヤママユ」—「ヘッセ昆虫展」がドイツ、スイスで開催されるに際して—、日本蝶類学会有志 Butterflies 自主刊行会『Butterflies (Teinopalpus)』53号、2009年、46-54頁、引用部分は47頁。

6　山本一:ヘルマン・ヘッセ「少年の日の思い出」備忘、金沢大学教育学部国語教室『金沢大学語学・文学研究』33号、2005年、11-17頁、引用部分は16-17頁。なお、ヘッセが「クジャクヤママユ」をミュンヘンの週刊誌『青年』*Jugend*(1911年6月6日号)に発表した時の年齢は33歳である。

7　この直前、初稿ではBeute同様「獲物」を意味するFängeが使われている箇所が、改稿では「発見物」を意味するFundeに改変されている。「ぼく」の攻撃的性格を重視する論者にとって、初稿のFängeの方が「ぼく」にはふさわしいように思われる。

8　山本(前掲書):14頁。

9　「少年の日の思い出」にのみ、berühmt[en]という形容詞が付されている。

10　この名訳は高橋健二にそのまま依った。ただし「やつ」は漢字に直した。

11　竹内常一：『読むことの教育――高瀬舟、少年の日の思い出』、山吹書店、2005 年、引用部分は 121 頁。

12　角谷有一：『少年の日の思い出』、その〈語り〉から深層の構造へ　――「光」と「闇」の交錯を通して見えてくる世界、田中実、須貝千里（編）『文学が教育にできること―「読むこと」の秘鑰―』、教育出版、2012 年、150-167 頁、引用部分は 151 頁。

13　綾目広治：幼いチョウ採集家の躓き――ヘルマン・ヘッセ「少年の日の思い出」、綾目広治『理論と逸脱――文学研究と政治経済・笑い・世界』、御茶の水書房、2008 年、268-282 頁、引用部分は 272-273 頁。

14　綾目（前掲書）：272 頁。

15　「少年の日の思い出」では、前置詞が auf に書き換えられている。

16　「少年の日の思い出」では、主語が「私の友人」mein Freund に書き換えられている。

17　「少年の日の思い出」では、主語が「ぼくの知人のひとり」einer meiner Bekannten に書き換えられている。

18　角谷（前掲書）：155 頁。

19　国語教育研究所（編）：『国語教育研究大辞典 普及版』明治図書出版、1991 年、783 頁。

20　吉住恵子、菅邦男：翻訳文学という側面を生かした指導法の研究――「少年の日の思い出」と「クジャクヤママユ」の比較を通して――、宮崎大学教育文化学部『宮崎大学教育文化学部紀要　教育科学』19 号、2008 年、79-107 頁。